



# サケの人工ふ化

大正

昭和

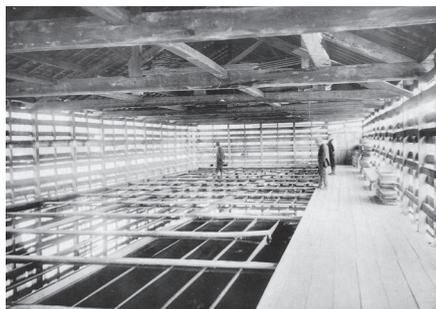
## サケの人工増殖の始まり

十勝川でサケの人工増殖が始まったのは明治28年です。サケは約4000年前（縄文時代）から自然の恵みとして人々に利用されていたということが、石狩地方にある遺跡（捕獲施設）からわかっています。

ですが、明治時代にはいると、国土開発や都市化が進み、森林や河川、沿岸等の自然環境が悪化して、サケは昔のように自分の力で子孫を残すことが難しくなりました。そこで、先人たちは自然環境をできるだけ守り、残された自然を有効に活用する方法としての工夫を重ね、自然環境にあまり負担をかけない人工ふ化放流技術を確認させました。



明治終わり頃のサケ漁  
(浦幌町十勝太)  
※十勝国産業写真帳より

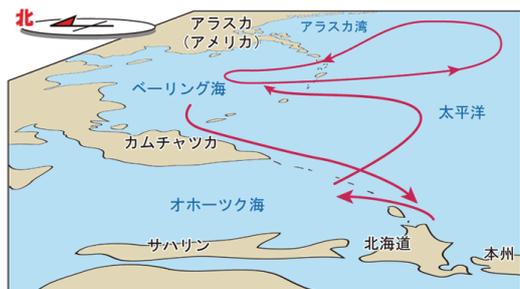


サケふ化場  
(帯広町)

※十勝国産業写真帳より

## 人工ふ化

人工ふ化は、採卵から稚魚になるまで約8ヵ月間を人の手で育てる方法です。春、十勝川のふ化場から放流された稚魚は、太平洋に出てからオホーツク海、ベーリング海、アラスカ湾を回遊し、3年～5年後に再び十勝川に戻ってきます。この人工ふ化事業は国、北海道、市町村、漁業関係者等によって行われています。



川から海へ  
下ったサケ  
の動き

## 川に戻ってくるサケ

サケの雌親魚は約3、000粒の卵を持っています。放流された稚魚は、5月サクラの花が終わるころに川を下り、海に出て約2か月間エサを取りながら成長します。しかしその間に、他の魚に食べられたり環境に適応できず、海で成長し、川へ戻ってくる割合は2～4%といわれています。



サケの稚魚

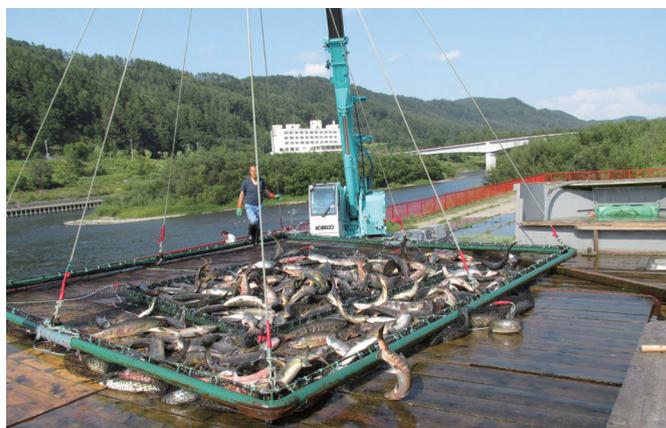


親サケ

## 地球温暖化による海水温上昇

もともとサケは冷たい水の中で生活する魚です。しかし、現在地球温暖化の影響か、十勝川の沿岸でも海水温が20度以上になることもあり、今後更に水温が高くなるのが懸念されています。

サケが生きられる水温は上限13度とされているので、現在の十勝川はサケにとって非常に厳しい環境と言えます。



千代田堰堤サケ捕獲場（平成27年）  
※十勝釧路管内さけ・ます増殖事業協会 提供

平成

令和

